

# 札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ  
 (財)札幌交響楽団内  
 札幌市中央区中島公園1番15号  
 (札幌コンサートホール内)  
 電話 011-520-1771  
 F A X 011-520-1772

## 第5回札幌響くらぶコンサート開催

### 人気指揮者で初のチケット完売

去る4月26日、札幌コンサートホール・キタラ大ホールで、第5回札幌響くらぶコンサートが開催されました。

今、人気絶頂の女性指揮者西本智実さんをお迎えし、交響組曲「シェエラザード」をメインに全曲ロシア音楽のプログラムでした。

今までは使用していなかったP席も発売しましたが、予想通り売れ行きは好調で、約200席の中・高生招待席を除き、全席完売となりました。当日券は30枚程度しかなく、あきらめ切れない様子でホールを立ち去る方が続出してしまいました。

毎回好評の「指揮者にチャレンジ」では、会場のあちこちからたくさんの方が上がり、予定を超える6名の方が挑戦しました。例によって「名指揮」も「迷指揮」もあり、会場は感心と爆笑に包まれました。

多くのファンの支持を得ていることを考慮し、来年も西本さんをお迎えしたいと計画しています。今年の教訓を生かし、チケットの販売方法の見直しが必要でしょう。また、ロシア音楽以外の西本さんの新たな魅力を、という声もあり、会員の皆様の声をお聞かせいただければと思っています。



札幌響くらぶは札幌を愛するファンの札幌応援団です



# 指揮者に聞く

進境著しい  
若手指揮者のホープ

しもの たつや  
**下野 竜也 さん**

自分の未熟を知り  
今は勉強の時です!!



## 下野竜也さんのプロフィール

1969年生まれ。92年鹿児島大学教育学部音楽科卒業。93年から96年まで桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室で学ぶ。96年イタリア・シエナのギジアーナ音楽院でオーケストラ指揮のディプロマを取得。99年まで大阪フィルの指揮研究員を務め、朝比奈隆、外山雄三、若杉弘、ジャン・フルネ等のもとで研鑽を積む。平成11年度文化庁派遣芸術家在外研修員に選ばれ、99年より1年間ウィーン国立音楽大学に留学、その後も01年まで同大学に在籍。2000年第12回東京音楽コンクール指揮部門に優勝、あわせて斎藤秀雄賞を受賞。01年第47回ブザンソン国際指揮者コンクールにも見事優勝を果たした。02年第12回出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金金賞を受賞。

これまでに秋山和慶、広上淳一、堤俊作、チョン・ミュンファン、ユーリ・テルミカーノフ、レオポルド・ハーガー、湯浅勇治、エルヴィン・アツツェルの各氏に師事する。

1月24日の第453回定期演奏会に客演された下野さん。楽員の皆さんからもその手腕を高く評価されています。定演の前々日お話を伺いました。

— 鹿児島大学のご出身だそうです。お生まれも鹿児島ですか。

下野 生まれも育ちも鹿児島です。

— 下野さんと音楽との出会いについてお聞かせ下さい。

下野 子どもの頃から何か習わせられたとか、そういうことはありませんでした。小学校に器楽部というのがありまして、そのトランペットに、憧れを持っていました。5年生の時にその器楽部に入ってトランペットを始め、6年生の時にはジュニア・オーケストラに入団できました。それが、私の音楽との出会いだと思います。

— 音大に行こうとは思わなかったのですか。

下野 音大受験必須のピアノもやってませんでしたし、親も鹿児島で教員になってくれればという感じでしたので、私も高校の社会か理科の先生になろうと思っていました。でも、音楽を勉強したかったので鹿児島大学の教育学部音楽科に進学しました。

— それが、なぜ、指揮者の道になったのですか。

下野 ジュニア・オケの頃から、トランペットは比較的演奏が少なく、指揮者を見ているうちに「ああ、自分もこうなれたら」と漠然と思っていました。特に、高3の時に「第9」を聴いて感動し、「自分もこんな指揮をしてみたい」と強く思うようになりました。

— でも、音大には行かなかった。

下野 はい。ピアノもやってないし、音大は無理だと思っていましたから。でも、4年間大学のオケでやっているうちに、指導していただいた堤俊作先生に「指揮者になりたい」と打ち明けたところ、「大変だよ。でも、本当にその気があるなら、東京に出て、桐朋に行かなくちゃだめだ」と言われまして、卒業後、桐朋の指揮教室に入りました。

— 桐朋の後はどうなされたのですか。

下野 大阪フィルで2年間指揮研究員をし、99年に文化庁派遣の研修員としてウィーン国立音楽大学に留学しました。

— ウィーンでの生活はいかがでしたか。

下野 それは楽しいものでした。オペラも日本円で数百円で見られる世界ですから。特に、世界中の様々な国の仲間達と接する機会に恵まれ、理屈ではなく、彼等の血の中に流れている音楽というものに触れて、強い感動を覚え



ました。日本人である自分は、「音楽的心」を、もっともっと育てなければ、と実感しました。

—— 留学中の失敗談などはありますか。

**下野** やはり、言葉ですね。ウィーンの資料館に行った時に、「エアバクセン・アインマル・ビッテ（大人一枚下さい）」と言うべきなのに、何を間違えたか「エルドベア・アインマル・ビッテ（苺一つ下さい）」と言って、入場券売りのおばさんに啞然とされたりしました。

—— ところで、指揮者として目指そうという目標は何でしょう。

**下野** 二つあります。1つは、当然のことながら自分のクオリティーを上げたいということです。私は今、自分の未成熟度を痛感しています。技術、精神両面で深く、高くなりたいと思います。それが、結局は聴衆の皆様への真摯な対応だと思っています。

2つは、エデュケーション・プログラムの充実です。今の若い世代が、どんな音楽に強く魅かれるのか、私にもよく分かりません。しかし、時と世代を越えたクラシック音楽の素晴らしさは知っています。それを、理屈ではなく、小さな子どもから楽しめるような機会を作っていくのは、現在音楽に携わっている私たちの義務だと思っています。

—— 現在の活動状況についてお聞かせ下さい。

**下野** 数年前までは、日本とウィーンでの生活が半々でした。今は3分の1はヨーロッパ3分の2は日本という状況です。ヨーロッパでは専ら勉強と、自分のオーバーホールといえますか、音楽の本質の把握に努めています。

—— 強く印象に残っている演奏としてはどんなものがありますか。

**下野** 1999年9月にウィーンに留学してすぐに、ロリン・マゼール指揮のウィーン・フィルのブルックナーの5番を聴きました。「打ち負かされた！」という感じの衝撃でした。オケの音は勿論、ムジーク・フェライン・ザールの響き、会場を包む雰囲気etc、そのすべてからヨーロッパ音楽の極致というものを痛感させられました。

—— ちょっと話を変えて、初めての北海道はいつですか。

**下野** 大学3年の時ですから、1990年だったと思います。女満別でのサマースクールでした。当時、国内で指揮のセミナーなんて他にありませんでしたから、親に頼んで参加させてもらいました。実は、その時のモデル・オーケストラは、札幌の楽員さんが主体だったのです。後に、札幌さんに呼ばれた時に、何人かの方に、「どっかで会ってますよね」なんて言

われました。

—— 北海道の初印象はいかがでしたか。

**下野** 同じ日本なのに、別世界という感じでしたね。真夏なのに涼しく過ごしやすい、そして自然のスケールが圧倒的に違う。

—— 札幌に関してはいかがでしたか。

**下野** 初めて札幌に来たのは、1999年3月の洞爺湖定期の時でした。大フィルにいた頃で、札幌は来てみたら大都会なのでびっくりしました。大阪を発つ時には気温23度、札幌に着いたら-3度、また、びっくりしました。



—— 札幌の第一印象はどうでしたか。

**下野** 「大好き！」の一言です。大阪でも、いいオケだと噂には聞いていました。「若い者には怖いオケだぞ」なんて言われましたが、若手にもしっかりと前向きに対応して下さり、とても嬉しく思いました。とにかく音がきれいだと思います。

—— キタラはいかがですか。

**下野** 日本で一番のホールだと思います。それぞれの音がよく聴こえ、かつ、音が広がってゆくのは、何とも言えない快感です。ロケーションも素晴らしいですね。

—— 今後のスケジュールをお教え下さい。

**下野** 2月にウィーン室内管弦楽団を指揮し、実質的なウィーンデビューになります。フランスでも、幾つかのオケを指揮することになっています。国内では都響、東響、日フィル、東フィルなど、そして、広響、仙台フィルや山響にも出演の予定です。

—— かなりハードですね。

**下野** ええ、でも、自分にとって無理にならないようにやっていこうと思っています。

—— 明後日の定期演奏会を楽しみにしております。今日はお疲れのところ、ありがとうございました。

**下野** こちらこそ、ありがとうございました。

(佐藤良次)



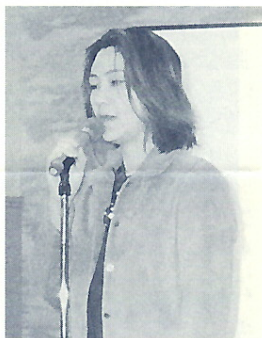
# 本年度第一回交流会報告

毎年恒例となった「札幌くらぶコンサート」後の交流会は、出席申込み多数のために、会場をレストラン・キタラからホテル・ルーシス札幌に移して、多くの楽員、会員が参加して行なわれました。

初めに主催者を代表して上田文雄会長が挨拶。続いて西本智実さんの挨拶と乾杯で楽しい交流が始まりました。札幌の佐藤光明専務理事や楽員代表の田中徹さんの挨拶のほか、楽員のパート別のアピールなども飛び出し、いままでにない熱気と盛り上がりでした。その熱気の一部を写真でご紹介します。



上田会長



西本さん



佐藤専務理事



田中さん





## 札幌で日本デビュー

～外国人指揮者編①～



札幌の演奏会で日本デビューした指揮者やアーティストが大勢いる。

新人の指揮者は名前が知られていないため、また、ベテランの場合でも、どこかのオーケストラとの専属契約が優先し、他のオーケストラに出演できないなどで、まだ来日していなかった例があった。

札幌は日本の中でも地理的な関係から、他の日本のオーケストラに気を遣わないで独自の道を歩めた。新人指揮者がデビューする機会が多く、楽団員も新人指揮者には何故か優しく、力量の足りない部分はオーケストラの側で補って演奏するため、新人は札幌でデビューしたがるのも事実だ。

オランダの指揮者ユベール・スダーンは札幌が招待して1975年に初来日した。この年のグイド・カンテルリ国際指揮者コンクールに優勝したばかりだったので、指揮のスタイルも力任せのぎこちないものだった。当時はまだ学生気分が抜けなくて「ホテル代がもったいないから」と、知り合いが居る北大の外人講師宿舎に寝泊まりし、毎朝、北大の向かいにあった喫茶店の前で待ち合わせ「夕べは何を食べたの」「おいしいパンを買って帰ったから、スコアの勉強をしながらかじったよ」と言う会話をしながら、私の軽自動車で練習場の真駒内青少年会館まで送ったものだった。滞在期間中に支払った、楽団員の旅費規程に基づくホテル代と日当も節約していたようだった。練習では楽団員と言いつつもストイックな指揮者だったが、3年後に美しい夫人を伴って再び来日した時には、もう大物の予感を漂わせ、悠然とした別の指揮者に化けていた。その後、大いに売れ出し、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団の首席指揮者やロワール管弦楽団の音楽監督などで活躍し、時々新日本フィルや東京都響を指揮しに来日する大マエストロになっている。

1976年、民音指揮者コンクール第2位に入賞し、翌年2月にご褒美の演奏会で札幌を初めて指揮、ラヴェルの「マ・メール・ロア」を絶妙な味付けで演奏したジェローム・カルタンバ

ク（実はこの名演が民音関西事務局の耳に入り札幌初の関西公演実現につながった）、その後78年2月に札幌が単独で招待した時、羽田空港の入国管理事務所から「カルタンバックと言う人が日本に到着したのだけど、何をしに来たのですか」と札幌事務局に電話があり「演奏会の指揮者です」と答えれば「ヴィザを持たないで来日しているので、空港から外へ出せないのですが」とのこと。「明日の午後から練習が始まるのですけど」「このままでは空港から外へ出すことが出来ません」。練習前日の午後4時頃の話である。

幸い、担当者がとても音楽好きな事務官だった。「特別な方法をお教えします。法務大臣宛てに請願書を書いて下さい。この事務所は空港内にあるので、最終便に間に合えば明日の第1便で札幌へ入れます」と、懇切丁寧に教えてくれた。札幌の法務局へは、羽田から電話で必要書類の書式を伝えてもらい、すぐに取りに行った。当時の東京行き最終便は午後7時30分。書類作りに許される時間は1時間しかなかった。夢中で用意し、最終便には何とか間に合った。翌日、千歳空港で顔を会わせた本人は「ヴィザが要るとは思ってなかった」と一言。

その後、フランスのナンシー・ロレーヌ歌劇場の音楽監督、サンフランシスコ・オペラでのデビューの成功などで着々と実績を上げ、二期会のオペラ「ペレアスとメリザンド」の指揮に来日するなど大活躍している。

今年2月第454回定期演奏会を指揮したジェームス・デプリーストはアメリカでは既に大マエストロと呼ばれる存在だった。20歳の時国務省からの派遣で東南アジアへ指導に行き、そこでポリオを患い下半身が不自由になった。そのために、特製の椅子に座って指揮をしている。私が88年にアメリカのオーケストラ事情を視察に行った時、ポートランド・オレゴンにあるオレゴン交響楽団の演奏会で初めて知った指揮者だった。翌89年10月に札幌だけのために初来日した。

つづく

(竹津宜男)



## PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 クラリネット副首席奏者

みかめ よしのり  
三瓶 佳紀 さん

### 音楽との出会いは

3歳からヤマハ音楽教室に通い、ピアノを習いました。多分それが音楽との出会いだと思います。

### クラリネットになったのは

ヤマハの後もピアノの個人レッスンを受けていたのですが、ピアノを習うのは女の子が多く、アンサンブルの機会も少ないので他の楽器をやってみたいと思っていた時に、ピアノの先生から渡部大三郎先生を紹介され中2から習い始めました。その後は、高校の吹奏楽部を経て音大と、ずっとクラリネットです。

### クラリネットの魅力は

音ですね。音域の広い楽器で、多様な表現が可能です。本番でモーツァルトの曲なんかを演奏していると本当に幸せを感じます。

### 札幌入団までのいきさつは

音大の大学院を終了した後、ドイツのカールスルーエ音大に留学しました。3年弱在籍した後、休学して一時帰国し、オーケストラアンサンブル金沢の契約団員として1年半活動しました。その後、カールスルーエに戻り、卒業試験を受けて帰国した時に札幌のオーディションがあり、入団ということになりました。

### 思い出に残る演奏といえば

札幌の団員として初めての演奏会で、曲が始まる直前に眼鏡の右レンズがとれてしまい、左目だけで演奏したことです。楽譜を追っていくのが精一杯、無事終ることだけを考えていて、ほろ苦いデビューになってしまいました。それ以降、本番前には、必ず眼鏡を入念にチェックしています。

### 札幌の魅力は

抽象的で申し訳ないのですが、“音が良い”ということですね。千歳出身なので子どもの頃から聴いて



いましたが、札幌に入る前に日演連の新人演奏会で協演させていただいて、落ち着いた響きに感動しました。

### 趣味はお持ちですか

ちょっと変っているのですが、本屋さんでの立ち読みです。一日一杯でも苦になりません。立ち読みで小説一冊を読んでしまうこともあります。ほかには、食べることです。作る方にも興味があり、シュークリームなどのお菓子作りも始めました。

### 将来への夢をお聞かせ下さい

楽器を演奏しているというのではなく、演奏しているのだけれど、それが話をしているような、自分が聴衆に語りかけているような演奏をしたいというのが目標です。多分、一生かかって実現出来るかどうかということだとは思いますが。

### 昨年来の札幌の危機報道については

確かにショックではありました。しかし、ある意味では札幌の存在を知ってもらえるチャンスでもある訳です。今まで以上に頑張ろう、という気持ちにさせられますし、今は楽員皆が前向きな気持ちになっていると思います。

### 札幌くらぶの存在については

楽員にとっては心強い存在だと思います。楽員だけが頑張ろうとしても、結局は空回りになってしまいます。聴衆と楽員が心を通わせる関係になればオーケストラの発展はあり得ません。そのためにも今まで以上に多くのファンを獲得していかなければなりません。札幌くらぶの皆さんがその一翼を担って下さっているのは本当に有難いことだと思います。



## 札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

ディ・パスクアーレ・ヴィンチェンツォ さん



### ご出身はどちらですか

イタリア共和国、ミラノ市の出身です。

### 音楽との出会いはいつですか

私の両親は、音楽家ではありませんが、母はクラシック音楽が大好きで、毎日、ラジオのクラシック音楽番組（特にオペラ）を聴いていましたので、生まれる前からクラシック音楽を聴かされていたという環境にいたようです。（笑）

### なぜヴァイオリンだったのですか

幸運にも、私の通っていた小学校に、ミラノ市立音楽学校の教授達が来てレッスンをしてくれるというミラノ市の企画があって、それが音楽を習うきっかけになりました。しかし、音楽学校の一年目は、音楽の才能を見分けるため、音楽理論とソルフェージュの授業を週二回、一年間受けて、その後、成績によって専攻する楽器を振り分けていました。私はピアノを希望していたのですが（姉がすでにピアノを弾いていたので…）先生からソルフェージュの成績が良かったので、ヴァイオリンをすすめられて、ヴァイオリンを弾く事になりました。

### 来日 そして 札幌入団のいきさつは

私は妻にイタリアで知り合って、イタリアで結婚して生活していました。5年が過ぎ、妻が日本で生活出来るなら、帰りたいと言い出しました。日本で生活するには、私が日本で就職することが条件で、オーケストラの仕事は、全世界どこでも同じだと思っていたので、日本のオーケストラのオーディションを受ける決意をしました。

その当時、義理の母の調べで、札幌のオーディションがある事を知らされ、オーディションを受けに来ました。

### 日本の第一印象はいかがでしたか

1990年のお正月が初来日です。当時、まだ婚約者だった妻の、東京の実家で過ごしました。

東京の大きさ、人ごみと秋葉原のHi-Tech街の凄さは印象的でした。

### 北海道と札幌の第一印象はいかがでしたか

オーディションのため、5月に初めて北海道を訪れました。

5月の末だったのですが、12℃しかなくて、ミラノではすでに夏服で過ごしていたので、とても寒かったのを覚えています。大通に面しているホテルに泊まり、大通公園の花に溢れた美しさに魅了されました。

入団は9月で、いきなり、演奏旅行で道東に行きました。すべて車で移動したので、北海道の大自然を満喫しました。

私はミラノっ子なので、こんな大自然の中で生活出来るなんて、幸せだと思っています。しかも、札幌は都会なのに、車で一時間も乗れば、自然の中で心を休ませる事が出来るので、素敵なお所だと思います。

### 趣味はお持ちですか

誰かが、私の趣味は、雪かきだと言っていますが（笑）、本当は音楽を聴く事と読書が趣味です。雪かきは、ストレス解消です。（笑）

### 将来の夢をお聞かせ下さい

私の年では、夢よりも希望でしょう。それは、まず、私の子供が元気で立派に成長してくれることです。

そして、札幌がいつまでも聴衆の皆さんから愛され続けるオーケストラでありたいと願っています。

### ファンに何か一言を

皆さんの応援が、何よりも私達の力になっていきますので、これからもよろしくお願いします。

（佐藤良次）



from 「札響くらぶ」

## 会費納入はお済みですか

新年度になり、会員の皆様のもとには会費納入のお願いと振替用紙をお送りいたしました。もう納入はお済みでしょうか。

毎年お忘れの方が相当数あり、単にお忘れなのか、退会を希望されているのか判断がつかず、何度か確認のお手紙を差し上げています。そのための郵送料もかなりかかり、また、事務的な作業はすべてボランティアのスタッフが行なっていますので、その作業がかなりの負担になっています。

もう一度ご確認の上、未納の場合は早急に振込をして下さいますようお願いいたします。また、何かのご都合で退会される方は、その旨を退会届でご一報いただければ幸いです。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

なお、4月現在での登録会員数は遂に500人の大台を超えました。

## 定期会員になりませんか

昨年来の「札響の危機」報道には、我々ファンも驚き、かつ危機感を募らせました。

今、札響は「私たち札響は変わります！」をスローガンに、理事会、事務局、楽員が一体となって再建に向けて努力を始めました。具体的な動きとしては、「札響ハートフルプロジェクト2003」として再建プログラムが発表されました。これに基づいて、マスコミに報道されたり、我々が実際に体験しているものとしては、例えば、「新ロゴマークの決定」「事務局の大胆な革新」「定期演奏会での、楽員有志によるロビーコンサートと、アンコール演奏」「定期演奏会の『学生会員』の新設」「札響ハートフルコンサート(仮称)による教育プログラムの充実」「札響シンフォニックポップスの新設」「札響による教育・福祉団体へのボランティア活動への積極的な支援」「北海道民9999人の第九コンサートの企画」などで、早くもその成果は徐々に表れているようです。

このような札響による「自力再建」の努力を、我々ファンとしても「道民の宝である札響をなくしてなるものか！」の気概を持って全面的に応援していきたいと考えています。

札響再建の大きな柱は、「維持会員・定期会員の確保と増加」です。札響くらぶでは、現在定期会員の増加に向け、独自に支援策を策定中ですが、その実施までには事務局の営業活動との整合性を図るなどの課題があり、いままし時間が必要です。

しかし、それらの何らかの方策によらなくとも、元々札響くらぶ発足の大きな目標の一つは「定期会員を増やし、定期演奏会の2回公演を目指そう」というものであったことを再確認すべきです。

札響くらぶ会員の皆様の一人でも多くの方が、定期会員になって下されば、札響にとっての大きな、そして実質的な支援になります。皆様のご協力をお願い申し上げます。また、同時に札響くらぶ会員を増加させることも、大きな支援になります。一人でも多くの方に声をかけてみて下さい。

## 編集後記

それにしても、西本さんの人気の高さには驚かされました。チケット入手と交流会への出席のため、大阪や東京から新規入会の申込みが相継ぎ、スタッフもびっくりさせられました。

何でも、西本さんのファンクラブのHPに札響くらぶコンサートの情報が載ったそうで、そのせいだったのでしょうか。

実は、西本さんは、数日前から風邪をひき、点滴を受けながらのステージでしたが、そんなそぶりは見せず、交流会にも出席して下さり、多くのファンのためにサインや記念撮影に応じ

ていました。

交流会は、文字通り熱気に包まれたという感じで、楽員さんや事務局の力強い決意に会員も感銘を受け、一層の応援を心に誓っていたようです。特にフルートの森圭吾さんの「フルートとオーボエは愛人関係」の発言を発端に、各パートが「愛情ではわがパートは負けない」と盛んに自分のパートがいかに深い愛情で結ばれているかをアピール。いままでにない盛り上がりとなりました。会員の皆さんも一層札響に親しみを感じたようでした。(佐藤良次)